中学校英語教科書の比較検討

― wh 疑問詞に焦点を当てて ―

上　西　幸　治
広島大学外国語教育研究センター

1　はじめに

中学校の新学習指導要領が2008年改訂されて早５年が経過している。中学校では2012年から全面的に新学習指導要領が実施され，その指導要領の下で，英語授業が日々実践されている。それに伴い，英語教科書も改訂され，新しい教科書で中学校の生徒は英語を学んでいる。高校現場では2009年に学習指導要領が改訂され，本年度より全面実施という形で英語授業が行われている。その中で，例えば「英語の授業を英語で教えるのが原則」という指針が示され，英語教師は日々奮闘をしている。

中学校では各学校・各教師によって指導方法はさまざまであることは言うまでもない。しかし，どの学校でも文部科学省（以下，文科省）検定済みの教科書から一つの教科書を選定して教えている。英語力を伸長するために重要となる，その英語教科書について探求を試みた。

文科省は，2008年３月，小・中学校の学習指導要領及び幼稚園教育要領を，2009年３月，高等学校・特別支援学校の学習指導要領を改訂した。

＜全面実施スケジュール＞

小学校：2011年４月から
中学校：2012年４月から
高等学校：2013年度入学生から（数学及び理科は2012年度入学生から）
幼稚園の新教育要領：2009年度から

ここで，文科省が2008年に告げた中学校新学習指導要領実施に向けた移行措置文書の中で，外国語科の改善の基本方針について以下のように述べている。

・４技能を総合的に育成する指導を充実する（４技能をバランスよく指導)。
・教材の題材や内容については，外国語で発信しうる内容の充実を図る等の観点を踏まえ，４技能を総合的に育成するための活動に資するものとなるよう改善を図る。
・４技能の総合的な指導を通して，これらの４技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに，その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ，文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る。また，コミュニケーションを内容的に充実できるよう，指導すべき語数を充実する。
・「聞くこと」,「話すこと」については，小学校段階での外国語活動を通じて一定の素地が育成されることを踏まえ，指導内容の改善を図るとともに,「読むこと」,「書くこと」の指導の充実を図り，四つの領域をバランスよく指導し，高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培う。

まず，全体的に英語コミュニケーション能力の育成のために，「４技能をバランスよく指導」することへの充実を図ることを目指していると言える。特に，４点目に記載があるように，小学校において外国語活動が導入され，中学校段階では「聞く・話す」力の育成だけに焦点を当てるのではなく，「読む・書く」力をも含めた総合的な英語力の育成を図ることの必要性が強調されている。更に，具体的な改訂事項として，身の周りの事柄について一層幅広いコミュニケーションを図れるように以下のことが記述されている。

① 授業時数を各学年とも年間105時間から140時間へと増加
② 指導する語数を「900語程度」から「1200語程度」へと増加

この２点は大きな転換である。これまで行ってきた方針を改め，語彙数を増やし，更に授業時数の増加も行ったことは，日本の中等英語教育に良い影響をもたらすと期待される。

２　英語教科書研究

東南アジア諸国や近隣の中国・韓国の国々も，日本に先だって小学校に英語教育を導入し，さらなる中学校及び高校英語教育の充実を図っている。その目的は言うまでもなく，グローバル化時代に対応できる英語コミュニケーション能力をもった人材育成を推進することである。その目的のために，各国の教育省は自国の英語教科書の作成も手掛けてきている。そのような実態もあり，英語学習者にとって英語力伸長，特にコミュニケーション能力向上のためには，学習者にとってより有用な英語教科書が必要である。よりよい英語教科書を学習者に利用させるためには，英語教科書の分析・検討することは必要不可欠なことと言える。それ故，過去の日本を含むアジア諸国（中国・マレーシア・タイなど）における英語教科書の研究は近年盛んに行われている。それを簡単に概観すると以下のとおりである。

まず，中学校・高等学校英語教科書比較研究の場合，語彙の視点で日本の教科書とアジア諸国の教科書を比較検討し，日本の英語教科書の圧倒的な語彙数及び異語数の少なさを指摘している（Hettarchchie, *et al.* 2008; Miura, *et al.* 2008, etc.）。また，文法項目の中で「不定詞」に焦点を当てて研究を試み，ESL の国（スリランカ）の教科書と EFL の国々（日本・韓国・中国・タイ）の教科書を比較した結果，ESL の国の方が不定詞の全用法を早くから学習者に提示する傾向があり，その頻度も高い傾向があった（Uenishi, *et al.* 2008; Uenishi, *et al.* 2007, etc.）。更に，文法項目の中でも「動詞」に焦点を当てて研究を進めた結果，日本の be 動詞の導入が他国と異なり，一般動詞の過去形導入も他の国々より遅いことが分かった（Abe, *et al.* 2008; Asai, *et al.* 2007, etc.）。

更に，本研究の英語教科書分析で焦点となっている wh 疑問詞に関する研究について簡単に触れておく。小学校英語教科書分析において，英語コミュニケーション能力向上を鑑みて，文法項目「疑問詞」に視点を当てて英語教科書を比較検討している（Uenishi, 2012; Uenishi, 2010; Uenishi *et al*, 2009, etc.）。その結果，日本の英語テキストは他国の教科書に比して，語彙の頻度や初出・継続性等において，更に検討が必要であることが分かった。また，４か国全ての国々の小学校段階での英語教科書で，what 疑問詞が最も使用頻度が高かった。マレーシア，タイ，日本では，全体的には how が２番目に頻度が高く，中国では where であった。更に，疑問詞の提示に関して，日本に比べて，他の３か国の英語教科書においては，学年進行とともに段階的にうまく行われているようである。

結局，英語教育を考える上で，常に大きな焦点となるのは指導する英語教師と使用する英語教科書であろう。本研究では，後者の英語教科書に焦点を当てて，研究を試みた。具体的には，英語コミュニケーション能力の育成を考慮したものであるかどうかに関わって，wh 疑問詞を用いた疑問文に焦点を当てて分析・考察を行った。

３　研究目的及び方法

学習指導要領の改訂によって，４技能を統合した形で学習者の英語コミュニケーション能力の伸長に一層力を入れる方向へ加速していると言える。その英語コミュニケーション能力を育成していく上で重要となるのが，日々の授業で使用している文科省で認可された検定済みの英語教科書である。つまり，その指導方針が教科書作成にも大きな影響を及ぼしていることは疑う余地もない。

本研究では，その教科書に着目し，英語でコミュニケーションをする際，つまり相手との対話をする上で重要となる疑問文に焦点を当てた。その疑問文の中にも大きく分けて yes, no で答える疑問文と疑問詞を用いた疑問文がある。ここでは，単純な受け応えよりも会話の展開がより発展的に行われる疑問詞を用いた疑問文を対象にして研究を試みた。

一般的には，文科省の *Hi, friends!* を活用しながら英語学習を始めるのは，小学校５年からである。本研究の場合，日本の中学校英語教科書（１年から３年）を対象としているため，学習者がテキストを用いて英語学習を始めて３年目から５年目となる。したがって，比較対象とするアジア諸国（中国・タイ・マレーシア）の英語教科書を英語学習３年目以降の小学校３年生から５年生の教科書とした。

まず，研究方法として，新旧中学校英語教科書３か年分（*New Horizon* と *Sunshine*）から各疑問詞を用いた直接疑問文を抽出し，その個数をカウントした。その際，関係代名詞（副詞）や感嘆文に使用されている疑問詞及び相手への直接の問いにはならない間接疑問詞を除いてカウントを行った。その後，1000語当たりの頻度数を計算し，本研究のデータとして用いた。

研究目的としては以下の通りである。

(1) *New Horizon* と *Sunshine* それぞれの英語教科書は，疑問詞の総語数の観点から見て，学習指導要領の改訂により新版と旧版の間で相違が見られるか。
(2) 上記した２つの英語教科書内の5W1H の各疑問詞に関して，新版と旧版の間で使用頻度の相違があるか。
(3) 新しい教科書の中で各疑問詞は，どの程度の頻度で使用され，両者の教科書に相違があるか。
(4) 疑問詞使用の観点から見て，小学校英語テキスト *Hi, friends!* と中学校英語教科書との間に一貫性はあるか。
(5) 他のアジア諸国の英語教科書と比較して，日本の中学校英語教科書は疑問詞使用の観点からコミュニケーション重視と言えるであろうか。

４　結果と考察

上記の目的に基づいて，中学校で使用されている中で，大きなシェアをもつ２つの英語教科書 *New Horizon* と *Sunshine*（１年生から３年生まで）を比較・検討してみた。また，アジア諸国の英語教科書と比較し，検討も行った。

4.1　研究目的（1）

まず，研究目的（1）「*New Horizon* と *Sunshine* それぞれの英語教科書は，疑問詞の総語数の観点から見て，学習指導要領の改訂により新版と旧版の間で相違が見られるか」に関して分析・検討を試みた。

New Horizon と *Sunshine* の新旧の中学校英語教科書に関して，総語数を比較・検討してみた。まず，学習指導要領改定前の英語教科書（旧版）に関しては，総語数を見る限りさほど差は見られない。しかし，新版を見てみると２つの教科書には明らかな総語数の差が生じている（図１）。*New Horizon* の場合，旧版に比べて１年生では，ほとんど総語数の増加は見られない。２年生で少し増加し，３年生では1000語弱しか総語数が増加していない。

一方，*Sunshine*（新版）の教科書は，１年生から３年生まで全ての教科書において，旧版に比べて2000語から3000語も総語数が増加している。学習指導要領によって，異語数は1200語程度と限定されているので，総語数がこれだけ増加をしているのを見ると，教科書そのものの作成方針を抜本的に変更した表れと考えられる。つまり，学習指導要領の改訂に伴い，４技能を統合した形での英語コミュニケーション能力の伸長重視に一層拍車がかかった今，*Sunshine* はそれを正面から受け止め，学習者がコミュニケーション能力向上のために視覚的にもより多くの英語に触れ，より能動的に英語を使用していく内容に焦点を当てて作成された教科書と考えられる。

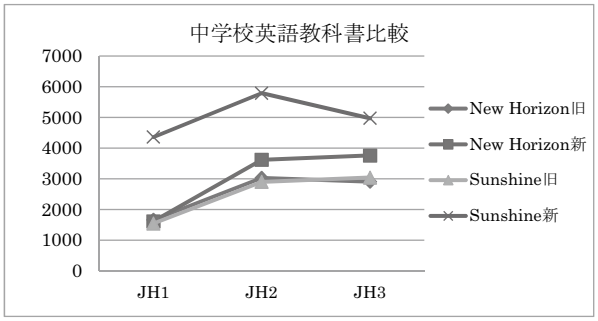

図１　総語数の比較

4.2　研究目的（2）

ここでは，研究目的（2）「*New Horizon* と *Sunshine* ２つの英語教科書内の5W1H の各疑問詞に関して，新版と旧版の間で使用頻度の相違があるか」に関して，分析・検討を行った。

4.2.1　What 疑問詞の場合

what 疑問詞の場合，図２が示すように，どちらの教科書とも１年生での頻度数が高いことが分かる。２年生，３年生ではかなり使用されてはいるが，頻度は低い。それぞれの教科書についてみてみると，まず *New Horizon* の場合は，２年生の教科書は新版・旧版ともにさほど頻度は変わっていない。しかし，１年生では新版における what 疑問詞の頻度数がかなり増加しているのに対して，３年生では旧版に比べて，新版ではかなり頻度が低くなっている。

それに反して，*Sunshine* の場合，旧版の教科書と比較すると，新版は各学年とも what 疑問詞の頻出度がかなり高くなっている。１年生の教科書が１番頻度が高いことは先述したが，what

を使用した会話や説明の英文が多用されているようである。*Sunshine* の教科書作成におけるコミュニケーション能力の育成を重要視した一つの表れであろう。これを *New Horizon* のデータと比較してみると一目瞭然である（図２）。*New Horizon* の新版を見てみよう。１年生では *Sunshine* より少し頻度が低いが，２年生ではほぼ同じ頻度数となり，３年生になると，かなり頻度数に差が出ている。つまり，３年生では *New Horizon* の what の使用割合は *Sunshine* の半分以下となっているのが分かる。what の使用頻度にこれだけの差があると，教科書で学習者が目に触れる度合いも格段に差がつくことになる。

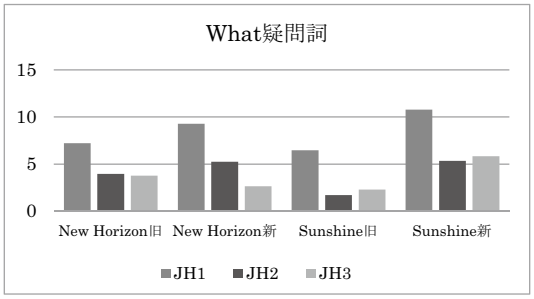

図２　What 疑問詞の頻度数（1000語中）

4.2.2　Who 疑問詞の場合

次に，who 疑問詞の場合を検討してみよう。*New Horizon*（旧版）は１年から３年まで頻度数は低く（0.5を少し上回った程度），ほぼ同じである。新版になると２，３年生では全く使用されていない。who を用いた疑問詞の活用を重要視していないようである。しかし，*Sunshine* の場合，*New Horizon* 同様，２年生では扱われていないが，３学年では頻度数がかなり高くなっている（図３）。両者を比較してみると，*Sunshine* の方が who 疑問詞をより使用し，学習者に who 疑問詞を定着させようとする意図が窺える。

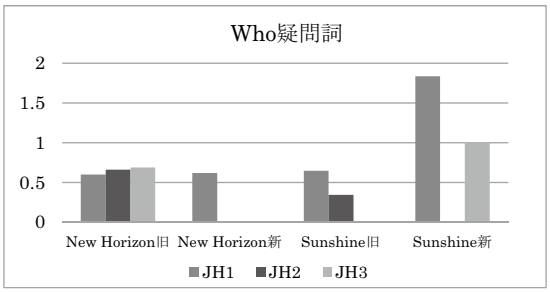

図３　Who 疑問詞の頻度数（1000語中）

4.2.3　Where 疑問詞の場合

次に，where 疑問詞の場合を検討してみよう。*New Horizon* の旧版・新版両方とも，１年は頻度数が高く，２年生では頻度数が極めて低い。３年生になると，旧版では一度も使用されていな

いが，新版では僅かではあるが扱われている。一方，*Sunshine* の場合，旧版では全学年とも極めて where 疑問詞の頻度数が低く，２年生では扱われていない。しかし，新版になると各学年とも *New Horizon* とほぼ同じ頻度数で使用されている（図４）。１年生で頻度が高いということは，１年生での疑問詞 where の定着を目指していると推測される。両者の教科書を見てみると，新版の数値はほぼ同じであるが，旧版と比較した場合，where の使用に関して，*Sunshine* の方がより改善をした様子が窺える。

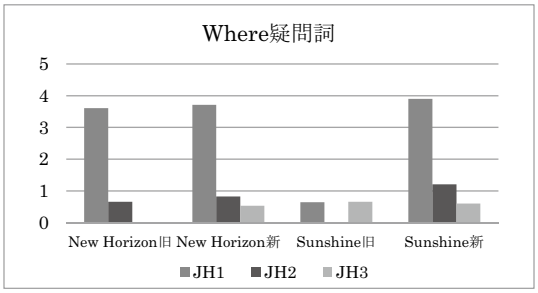

図４　Where 疑問詞の頻度数（1000語中）

4.2.4　When 疑問詞の場合

ここでは，when 疑問詞の場合を検討してみよう。*New Horizon*，*Sunshine* ともに when の頻度数は高くない。旧版・新版ともに１年生の方が多く使用されており，２，３年生では頻度数が極めて低い傾向がある。where の場合と同様，１年生において疑問詞 when の定着を念頭に置いているものであろう。

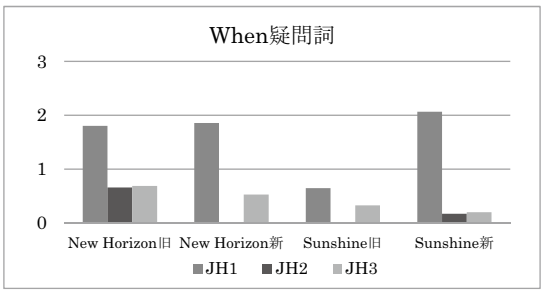

図５　When 疑問詞の頻度数（1000語中）

4.2.5　Why 疑問詞の場合

ここでは why 疑問詞の場合を検討してみよう。全体的に *New Horizon*，*Sunshine* ともに why の頻度数は，what などと比べるとそれほど高くない。しかし，図６が示すように，旧版・新版ともに多少の頻度の違いはあるものの，全体的に使用されているのが窺える。ただ，*New Horizon* の場合，旧版の１年生では why が使われていないが，新版では少し使用されている。しかし，新版の２，３年生では使用頻度数が低くなっている。確かに実際のコミュニケーション場面では，why 疑問詞を使用した相手の疑問に答える際，自分で考えてその理由を述べる必要があるので，

他の疑問詞に比べて難易度が高い。しかし，学習者の英語コミュニケーション能力向上を推進しようとするなら，より積極的に why 疑問詞を導入し，学習者の目に触れる機会を多くすることが必要となるであろう。

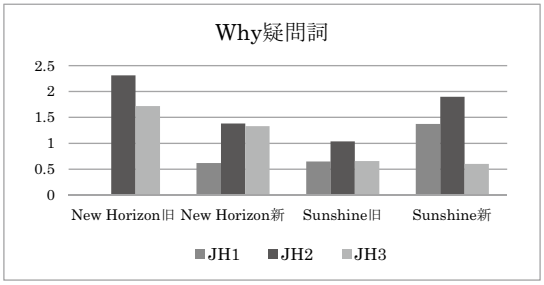

図６　Why 疑問詞の頻度数（1000語中）

4.2.6　How 疑問詞の場合

ここでは，how 疑問詞の場合を検討してみよう。how 疑問詞に関して，*New Horizon* と *Sunshine* は対照的な傾向を示している。*New Horizon* の場合，学年によって頻度数は異なるものの，旧版の方が新版に比べて頻度数が高い傾向がある。特に，新版の２，３年生の how の頻度数は極めて低い。コミュニケーション重視の流れに逆行しているようにも思える。一方，*Sunshine* の場合，how の頻度数が旧版に比べて格段に高くなっている。旧版において how の使用頻度があまりに低かったせいもあるが，教科書上で how 疑問詞に関わるコミュニケーション能力の育成に力を入れていることが窺える。how の場合，他の疑問詞と異なり，様々なバリエーションで使用されるので，頻度数は高い方が望ましいであろう。

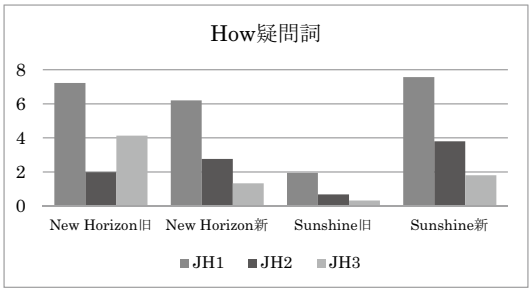

図７　How 疑問詞の頻度数（1000語中）

4.3　研究目的（3）

ここでは，２つの新教科書全体の疑問詞の頻度数を学年別に検討し，両者の教科書に相違があるのか，全体的に検討を行った。*New Horizon* と *Sunshine* の新版に関して，図８，９が示す通り，全体的な傾向として疑問詞の使用頻度は，学年が進むにつれて低くなっている。使用頻度が一番高い疑問詞は what で，２番目に how となっている。しかも，両教科書とも，学年進行とともに頻度数が大幅に減少している疑問詞も，what と how である。次に，where の頻度数が多い。

但し，両教科書とも，why 疑問詞が２年生の教科書では where よりも頻度数が高くなっている。

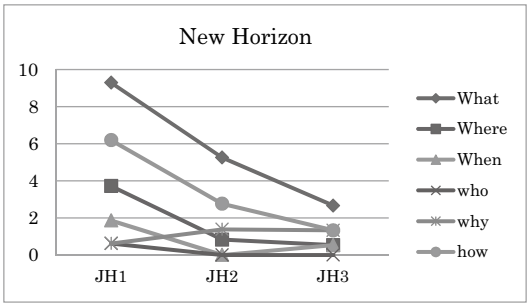

図８　New Horizon の疑問詞頻度数（1000語中）

特に，２つの教科書間で what 疑問詞の頻度数が大きく異なっている。全体的な傾向として，１年生から３年生に向けて疑問詞の使用頻度数は低くなっている。とりわけ，*Sunshine* の方が使用頻度数が高く，しかも２年生から３年生の教科書では，*New Horizon* の方は頻度数のグラフの下降が目立つが，*Sunshine* の方はさほど疑問詞 what の頻度数に変動はなく，むしろやや高くなっている。

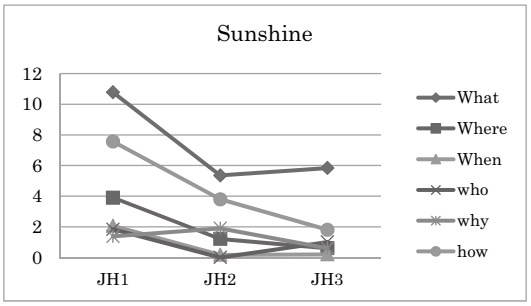

図９　Sunshine の疑問詞頻度数（1000語中）

上記の点から見て，*Sunshine* の方が what や how の疑問詞をより頻繁に使用して，学習者の目に触れさせ，それらの疑問詞を使用したコミュニケーション力により力を入れた教科書作成を行っていると思われる。

4.4　研究目的（4）

ここでは，「wh 疑問詞使用の観点から見て，小学校英語テキスト *Hi, friends!* と中学校英語教科書との一貫性はあるか」について検討する。このことを検討する上で，次の点を考慮した。小学校英語テキスト *Hi, friends!* は聞く・話すことを中心としたテキストになっており，学習者に英字を提示するコンセプトで作成されてはいない。とはいえ，英字提示の有無という問題はあるが，コミュニケーション能力の育成のために検討することは，今後の教科書開発をする上で意味

があると考える。

4.4.1　総語数比較

ここでは wh 疑問詞の総語数から小学校と中学校の英語教科書の比較・検討をしていく。まず，*Hi, friends!* から *New Horizon* と *Sunshine* の各中学校教科書への流れをグラフにして，その推移を見てみたい（図10 & 11）。

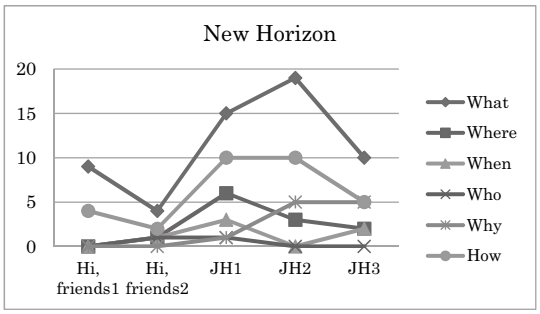

図10　Wh 疑問詞総語数（New Horizon）

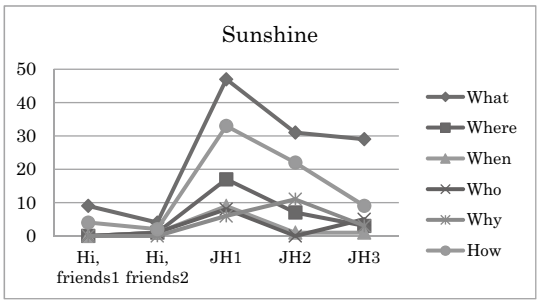

図11　疑問詞総語数（Sunshine）

グラフから分かるように，小学校において wh 疑問詞の提示（文字化）が不十分であることが明らかである。特に，小５から小６にかけての疑問詞の提示回数が減少し，中学校１年で急激に上昇するという現象がみられる。これは小学校で，聞く・話すことを中心とした英語授業を展開するために，英字提示を極力抑えたテキストを作成していることが原因である。このことは，幾多の研究者や教育者が述べているように，発達段階を考慮し視覚的に英語学習を促進する，教科書作成の方向になっていないことを明示していると言える。

4.4.2　wh 疑問詞英語表現

具体的な wh 疑問詞を用いた英語表現に焦点を当てて，小学校から中学校への一貫性の有無について検討する。小学校英語テキスト *Hi, friends!* で使用されている wh 疑問詞（表現）から見て，中学校との一貫性を考察する。具体的な英語表現として，以下のものが挙げられる。

Hi, friends 1の場合

・How many balls?（Lesson 3）
・What do you like?（Lesson 5）
・What color do you like?（Lesson 5）
・What do you want?（Lesson 6）
・What's this?（Lesson 7）
・What would you like?（Lesson 9）

Hi, friends 2の場合

・When is your birthday?（Lesson 2）
・Who am I?（Lesson 3）（ゲームのみで使用）
・Where is the station?（Lesson 4）
・Where do you want to go?（Lesson 5)*（文字の提示はないが授業内で使用）
・What time do you get up?（Lesson 6）
・What do you want to be?（Lesson 8）

これを見てわかるように，小学校英語テキストの*Hi, friends!*では，疑問詞whatを使用した様々な表現が最も多い。これは当然 what の使用頻度が高いこととも関連があるが，様々なバリエーションでこの疑問詞が使用されていることが理由であろう。他の疑問詞に関しては，how では５年生の最初に「How many …?」のパターンで出てくるだけである。疑問詞 who の場合は６年生の Lesson 3で「Who am I?」ゲームの中で使用させるだけのもので，会話での使用はないようだ。疑問詞 where, when に関しても，１レッスンだけ場所と時間を聞くために出てくるだけで，それ以上教科書上ではコミュニケーション活動を行っていない。つまり，what 以外の疑問詞に関しては，教科書上では中学校から本格的に学習を行うと考えてもよさそうである。

4.4.3　What 疑問詞の英語表現比較

ここでは what 疑問詞の英文に焦点を当てて，小学校と中学校の間で一貫性があるのかを探求していきたい。小学校テキスト内の疑問詞 what についていえば，相手の意向・願望などを聞く際によく使用される「What do you 動詞…?」「What 名詞 do you 動詞…?」のパターンが見られる。更に，物の名称等を尋ねる時に用いる「What's this?」，相手の意向を尋ねる際の少し丁寧な表現「What would you like?」が５年生で使用されている。この疑問詞 what が中学校英語教科書ではどのように扱われているであろうか。

まず，*New Horizon* で what 疑問詞の扱いを見てみよう。「What is / What's 主語 ?」のパターンは，１年（４回）２年（８回）３年（３回）の計17回使用されており，「What is it?」が４回扱われている。また，「What's this?」「What's that?」「What's your favorite?」などのように，「What's 主語 ?」のパターンは11回使用されている。他には，「What's up?」という colloquial な表現や「What's wrong?」（１年）「What's going on here?」（３年）のように what 疑問詞が主語として使用されている例も見られた。

次に，「What do you …?」のパターンについて検討する。この英文パターンは，１年（２回）２年（２回）３年（１回）の計５回使用されている。小学校のテキストで出てくる「What do

you want to be?」という表現が２年の Unit 3で扱われている。他には「What do you think?」（２回）「What do you do after school?」などが挙げられる。

さらに，「What 名詞 do you 動詞 …?」のパターンを見てみよう。このパターンは１回しか扱われておらず，「What foreign language do you study?」（１年）のように使用されている。しかし，「What 名詞 are you …?」のパターンでは２回扱われており，具体的な英文としては「What color are you looking for?」「What subject are you studying?」である。

他には，「What 過去形 ?」（２回）のパターンや「What (else) can we do?」（２回）「What does Figure 3 show?」「What are you going to do?」「What would you like to do?」なども回数は少ないが，２年・３年で使用されている。

一方，*Sunshine* の場合を見てみよう。「What is / What's 主語 ?」のパターンは，１年（12回）２年（１回）３年（３回）の計16回使用されている。また，「What's your job? 」「What's your hobby?」「What's the time difference between Tokyo and Vancouver?」などのように「What's 主語 ?」のパターンでは11回使用されている。*Sunshine* においても，「What's up?」（２回）という colloquial な表現があった。他には，「What is the most important thing to you?」（２年）のように what 疑問詞が主語として使用されている例も見られた。

次に，「What do you 動詞…?」のパターンを見てみよう。この英文パターンは，１年（10回）２年（４回）３年（４回）の計18回使用されている。*Sunshine* においては，小学校のテキストで出てくる「What do you want to be …?」という表現は，３年の最後でしか扱われていない。このパターンでは，主に「What do you do/study …?」（８回）が頻繁に１年の教科書で使用されており，２年生以降になると「What do you think of …?」「What do you want to do …?」「What do you like/call …?」などと多様な動詞を使用して，コミュニケーション能力を更に高めるように工夫していることが窺える。

さらに，「What 名詞 do you 動詞…?」のパターンを見てみよう。このパターンは１年（６回）２年（２回）３年（３回）の計11回扱われている。具体的には，１年生では単純に「What time/color…?」のように単純に名詞だけが使用されているが，２年生以降になると「What kind of fruit do you like?」（２年）のように「kind of」を入れたパターンで使用し，コミュニケーションの幅を広げている。また，What の後に現在進行形の疑問文が来るパターンが１年（７回）２年（１回）３年（３回）使用されている。例を挙げると，「What are you doing?」「What is he saying?」などである。

ここで what 疑問詞を使用した英語表現の観点から見て，*New Horizon* と *Sunshine* の明らかな相違点を列挙しておこう。*Sunshine* の方が総語数が多いので，当然表現形式も増加することにはなるが，*New Horizon* には使われていない多様な表現パターンを導入している。例えば，一つには過去形の疑問文である。例を挙げると，「What did you 動詞…?」のパターンを使用してコミュニケーションの幅を広げていることが挙げられる。２年（７回）３年（２回）で，この英文パターンが使用されている。具体的な例としては，「What did you see there?」「What did you make?」などがある。また，会話で相手の意向を尋ねるためによく使用される「What about …?」のパターンも，*Sunshine* の１年（１回）２年（２回）でのみ扱われている。更に，「What（名詞）can/shall/will 主語 + 動詞 ?」（６回）と異なる助動詞を使用した疑問文が多く使用されている。*New Horizon* の場合は，この形式では can のみが提示されているだけである。

上記したように，小学校英語テキストで使用された what 疑問詞を用いたパターンが中学校英

語教科書 *New Horizon* でも *Sunshine* でも使用され，両教科書とも応用的な表現として反復学習をすることで定着を図っていることが窺える。この意味では，what 疑問詞に関しては一貫性のある教科書内容となっていると言えよう。しかし，*New Horizon* の場合，学習者が読む英文パターンのバリエーションが少なく，しかも学習者自身に反復学習させるには，視覚的にもより多く疑問詞に触れる方がよいが，残念ながら教科書上での出現回数も多くはない。

他の疑問詞に関しては，中学校英語教科書の問題というより小学校英語テキスト *Hi, friends!* の文字提示の問題であろう。もちろん，研究目的 (2) で検討したように，中学校英語教科書の疑問詞の頻度数を見ると，特に 1 年生では頻度が高いが，学年が上がるにつれて低くなる傾向がある。教科書作成の検討事項として，学年進行につれて会話の文が少なくなるのはわかるが，コミュニケーション能力の育成を推進していく上で，教科書上でも疑問詞を積極的に使用して学習者の目に触れさせ，それを土台にもっとコミュニケーション活動が可能な状況作りをしていく必要があるようにも思う。英語教師が最大の教育条件とは言われるが，英語教師任せの英語教育（授業）では学習者の英語コミュニケーションの育成を推進していくには心もとない気がする。その教師の指導を支援すべき，良質の教科書の開発と提供が強く求められる。

4.5　研究目的 (5)

ここでは，研究目的「他のアジア諸国の英語教科書と比較して，日本の中学校英語教科書は疑問詞使用の観点からコミュニケーション重視といえるであろうか」について検討する。下の一覧

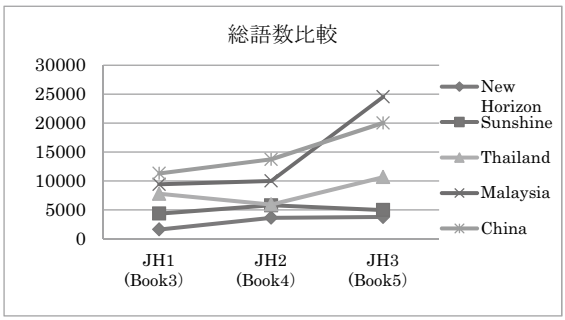

図12　総語数比較（４か国）

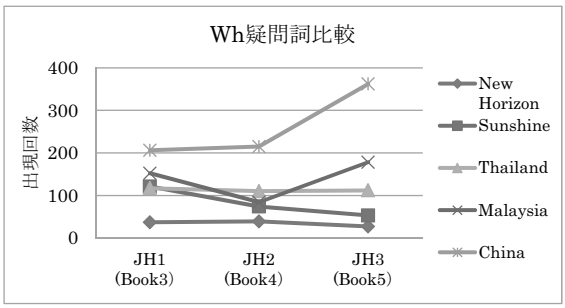

図13　Wh 疑問詞比較（４か国）

表は日本・マレーシア・中国・タイの英語教科書比較結果（Uenishi, 2012）と新教科書データを基にして，その結果をグラフにしたものである。

まず，総語数の観点からみると，日本の新版の英語教科書であっても，他の３か国の教科書に比べて，明らかに語数が少ない。教科書上の語数は授業の時間数等に関係してくるものであるが，中学校の授業も４時間となり，4.1 研究目的⑵で述べたように，教科書のボリュームも増してきており，特に新 *Sunshine* の教科書は，旧 *Sunshine* と比べて語数が格段に増加している。しかし，それでも他国の教科書の英語総語数には，はるかに及ばない（図12）。さらに，その教科書中での wh 疑問詞の出現回数も他国に比べて，格段に少ない実情がある。これは，先ほど述べたように，教科書のボリュームにも関わるので一概には言えない。しかし，絶対量が少ないということは，当然学習者の目に触れる度合いも低いことになり，学習者のコミュニケーション能力育成にも少なからず影響があるであろう。つまり，他国の英語学習者に比べて，英語コミュニケーション能力が伸長しにくい傾向があるとも言える。

先ほど記述したように，疑問詞出現回数の差は明らかである。中国とマレーシアの教科書に比べて，日本の英語教科書内の疑問詞出現回数はあまりに少ない。中学校１年の教科書でもその傾向はあまり変わらない。それに対して，中国とマレーシアの英語教科書は，学年進行とともに総語数が格段に増加し，wh 疑問詞の出現回数も増えている。

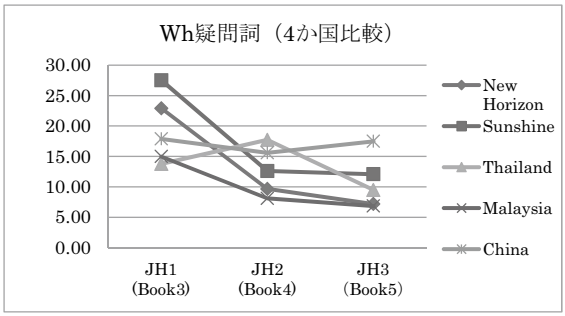

図14　Wh 疑問詞頻度数（1000語中）

wh 疑問詞頻度数の観点から各国の英語教科書を比較してみよう。図14が示すように，疑問詞の頻度数を見る限り，日本の２つの新版の教科書は，他国に比べて高い数値を示している。特に，日本の中学１年の英語教科書を見ると，他国の Book 3の教科書よりも頻度数が高い。２年になると wh 疑問詞の頻度数が低くなり，タイ，中国に続いて頻度数が高くなっている。３年生の教科書では，*Sunshine* が中国に続いて，*New Horizon* は更にタイに続いて頻度数が高くなっている。これはあくまで相対的な数値であるので，一概には言えないが，頻度数の観点から見る限りでは，日本の教科書も他国の教科書同様, wh疑問詞の使用を考慮したものとなりつつあると言えよう。

５　結論

本研究では，日本の２種類の中学校英語教科書の中で，大きなシェアを誇る *New Horizon* と *Sunshine* を選んで検討をした。研究の焦点は，英語コミュニケーション能力の伸長において重要と考える疑問詞である。

まず，総語数の視点から述べると，両方の教科書とも旧版に比べて総語数は増加している。しかし，新版を見ると *Sunshine* の方がかなり語数が多く，疑問詞の頻度数から見ても *Sunshine* の方が what, how を始めとして，全体的に頻繁に疑問詞が使用されている傾向がある。全体的には総語数の差はあれ，どちらの教科書とも１年生を中心に疑問詞が提示されている傾向がある。

また，新・旧の英語教科書比較の視点から述べると，*New Horizon* は旧版自体において，疑問詞（when, where, how）は，すでに *Sunshine* よりも頻度数が高かったせいもあり，大きな改善は見受けられない。しかし，*Sunshine* は what, how を中心に疑問詞の頻度が高く，旧版に比べて大きな改善が見られ，新版の英語教科書内では疑問詞全体の頻度が高くなっている。

小学校英語テキストと中学校英語教科書との一貫性に関して，全体的に小学校英語テキストの疑問詞出現は限定的なものであり，疑問詞使用において一貫性があるとは言い難いところがある。しかし，疑問詞 what に関しては，様々なバリエーションの表現を小学校ですでに提示し，それを中学校で復習・発展させている傾向はあると思われる。

他のアジア諸国の教科書と比較すると，日本の２つの英語教科書は旧版に比べて総語数，疑問詞出現回数において改善はされているものの，まだ不十分であることは否めない。しかし，疑問詞の頻度数において，他国の英語教科書に比べて，さほど問題はなくコミュニケーション能力の育成を考える上で教科書の改善はされていると言えよう。今後は，視覚的にも様々なパターンの疑問詞を用いた英文が，より学習者の目に触れていく英語教科書開発を支援すべく，更に研究を推進していきたい。

参考文献

Abe, N., Uenishi, K., Hosaka, Y., & Ozasa, T. (2008). A quantitative analysis of the first-year textbooks of five Asian EFL countries: Focusing on the introduction of verbs. 4th International ICTATLL Workshop Proceedings, 38-47.

Asai, T., Uenishi, K., Abe, N., & Ozasa, T. (2007). A quantitative analysis of the English textbooks of the five Asian EFl countries: With a focus on verbs. 3rd International ICTATLL Workshop Proceedings, 49-57.

Butler, Y. G., & Iino, M. (2005). Current Japanese reforms in English language education: The 2003 “Action Plan.” *Language Policy, 4*(1), 25-45.

Department of Education, Ministry of Education, Thailand, (2003). *Projects: Play & Learn 1*. Teacher’s Council of Thailand, Bangkok.

Hettarchchige, R. C. K., Hosaka, Y., Miura, S., & Ozasa, T. (2008). Vocabulary of the English textbooks of four Asian EFL countries and Sri Lanka: A quantitative comparison. 4th International ICTATLL Workshop Proceedings, 26-33.

Miura, S., Hosaka, Y., Hettarchchige, R. C. K., & Ozasa, T. (2007). A quantitative analysis of the English textbooks of five Asian EFL countries: With a focus on vocabulary. 3rd International ICTATLL Workshop Proceedings, 138-145.

Uenishi, K. (2012). A Comparative Analysis of English Textbooks in China, Japan and Thailand: A Focus on Wh-interrogative Questions. 17th PAAL International Conference Proceedings.

_____. (2010). A comparative study of English textbooks in Japan, Malaysia and Thailand. 15th PAAL International Conference Proceedings, 147-152.

Uenishi, K., Miura, S., Hosaka, Y., & Akase, M. (2009). A comparative analysis of English textbooks in Thailand and Japan: A focus on phrases with wh-interrogative questions. 5th International ICTATLL Workshop Proceedings, 79-87.

Uenishi, K., Akase, M., & Ozasa, T. (2008). A comparative analysis of the EFL/ESL English textbooks in Asian countries with a focus on the infinitive. 4th International ICTATLL Workshop Proceedings, 11-18.

Uenishi, K., Fujiwara, Y., Miura, S., & Ozasa, T. (2007). A comparative analysis of the frequency infinitive verbs in five Asian EFL textbooks. 3rd International ICTATLL Workshop Proceedings, 108-114.

アレン玉井.（2008）.「公立小学校における効果的なリーディング指導について（1）－アルファベット指導－」千葉大学教育学部研究紀要　56，15-23.

泉恵美子.（2009）.「タイ国における英語教育－日本の小学校外国語活動との比較－」京都教育大学教育実践研究紀要　9，97-105.

奥野　久.（2009）.「小学校学習指導要領における外国語活動の批判的考察－小学校英語教育の歴史と現状を踏まえて－」*Studies in English Language Teaching, 32*, 53-62.

鈴木康郎.（2007）.「タイにおける小学校英語教育の現状と課題」Retrieved May 19, 2009, from www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/05120501/s004_4.pdf

新里眞男.（2008）.「中学校の連携をどうするのか－成田市の小中一貫の取り組みから－」英語教育 9 月号 , 17-19.

Benesse 教材研究開発センター.（2012）.「小・中学校の英語教育に関する調査」速報版 http://benesse.jp/berd/center/open/report/syochu_eigo/2011/soku/pdf/soku_all.pdf.

松川禮子・大下那幸編著.（2007）.『小学校英語と中学校英語を結ぶ』高陵社書店 .

English Instructional Textbooks References

Chinese Textbooks

Ministry of Education, China. (2003). *Starting Line Students' Book 3 (1st & 2nd volumes)*. Lingo Media, Canada and People's Education Press, China.

_____. (2004). *Starting Line Students' Book 4 (1st & 2nd volumes)*. Lingo Media, Canada and People's Education Press, China.

_____. (2005). *Starting Line Students' Book 5 (1st & 2nd volumes)*. Lingo Media, Canada and People's Education Press, China.

Japanese Textbooks

文部科学省.（2012）.『Hi, friends! 1』東京書籍 .

_____.（2012）.『Hi, friends! 2』東京書籍 .

笠島準一・浅野　博・下村勇三郎・牧野　勤・池田正雄他.（2007）.『New Horizon English Course 1, 2 & 3』東京書籍.

笠島準一・関典明他.（2012）.『New Horizon English Course, 1, 2 & 3』東京書籍.

佐野正之・山岡俊比古・青木青也・佐藤　寧他.（2007）.『Sunshine English Course 1, 2 & 3』開隆堂.

新里眞男・佐藤　寧・山岡俊比古・高梨芳郎他.（2012）.『Sunshine English Course I, 2 & 3』開隆堂.

Malaysian Textbooks

Noor Fuzana binti Ya'akub. (ed.) (2004). *English Year 3*, Kuala Lumpur: Utusan Publications & Distributors Sdn Bhd.

Nor Syila binti Aziz & Sharifah Madiha binti Syed Abd. (eds.) (2005). *English Year 4*, Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

Nor Syila binti Aziz & Mariati Josepha binti Mustafa. (ed.) (2006). *English Year 5*, Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

Thai Textbooks

Office of Basic Education, Ministry of Education, Thailand, (2003). *Projects: Play & Learn 4*. Teacher's Council of Thailand, Bangkok.

_____. (2005). *Projects: Play & Learn 3*. Teacher's Council of Thailand, Bangkok.

_____. (2005). *Projects: Play & Learn 5*. Teacher's Council of Thailand, Bangkok.

ABSTRACT

A Comparative Analysis of English Textbooks at Junior High School: With a Focus on *Wh*-interrogative Questions

Koji UENISHI
Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

This paper reports on a comparative analysis of new and old versions of English textbooks at the secondary educational level in Japan (*New Horizon* and *Sunshine*) and those at the primary educational level in China, Malaysia and Thailand (Book 3 to Book 5, used from the third year of English study). The motivation behind this work lies in the belief that these analyses shed important light on the classroom content of teaching English as a foreign language. This study focuses on a comparison of the frequency of the *wh*-interrogative questions taught in the above-mentioned English textbooks. The aim is to analyze the corpora in order to identify some of the differences among the textbooks and to explore the findings which reflect the English language teaching curriculum in Japan. Each textbook was first digitized and then analyzed in terms of the *wh*-interrogatives. The results reveal the following:

First, the total number of words is greater in the new versions of English textbooks in Japan than in the old ones. However, *Sunshine* (new version) has a much larger total number of words than *New Horizon* (new version), and also, the *wh*-interrogatives in *Sunshine*, especially *what* and *how*, are more frequently encountered than in *New Horizon*.

Next, when comparing the new and old versions of the textbooks, it was found that *New Horizon* has improved only slightly in terms of *wh*-interrogatives. The reason for this can be attributed to higher frequencies of *where*, *when*, and *how* in the old version than those of the *wh*-interrogatives in *Sunshine*. On the other hand, the total frequencies of the *wh*-interrogatives, especially *what* and *how*, are higher in *Sunshine*, and in this respect it can be said that *Sunshine* has improved compared with the old version.

With regard to the use of *wh*-interrogatives, it is doubtful whether there is coherence between primary school and junior high school textbooks, because overall the occurrence of *wh*-interrogatives is limited in primary school textbooks. Regarding the *what* interrogative, however, it seems that various types of expressions are offered to primary school students and then what they learn is reviewed and further developed at junior high school. Even so, it cannot be denied that sufficient examples of *wh*-interrogatives in Japanese textbooks have not been offered to students even though the textbooks are an improvement on the old ones.

Finally, a comparison of the new versions of Japanese textbooks with other Asian countries' English textbooks shows that regarding the total number of words and *wh*-interrogatives, English textbooks in Japan still need to be improved. However, from the viewpoint of the

frequency of *wh*-interrogatives, both of the Japanese textbooks can be said to be getting closer to those of other Asian countries.